

かない。極めて呑氣な目的の研究所であつた。けれども主人が其處に入學したのは決してそんな悠々閑日月有と云ふ様な理由ではなく或る一種の眞面目な野心を持つて通學して居つたのであつた。その時分の講習所は無論、規模も小さく、始まつた計りでもあり、少しも世間に存在を認められて居なかつた、而かも僅々一ケ年の後、その少々たる講習所が一躍今の小石川に在る水彩畫研究所となり、堂々たる建物は行人の足をとゞめ、隆々たる名聲は漸次天下の耳目を惹くに至つたのを想へば其發達の速かなるに驚くと共に又今昔の感に堪へないものがある。僕はこの次から少しくその時代からの記憶を述べて見やうと思ふ。

#### 日本水彩畫會新會友

静岡縣掛川西町

山本直吉

鹿兒島市大黒町六

今村武兵衛

■『方寸』展覽會號記事には方寸言、展覽會評、すききらひ、浴後、出發前「オノト」來書等にて繪畫は公設展覽會出品畫、くのみ若木、カリカチュア等あり一部送料共十五錢五厘にして發行所は小石川區小日向臺町三丁目十八番地方寸社なり。

『日本美術』十二月號にはシヨールベンホーエルの建築論、日本本彫論、謠曲と圖案、鵬心君に答ふ、舊都の旅其他、畫苑にはコロタイプ七葉を挿む。一部送料共二十六錢發行所は本郷駒込富士前日本美術社なり。

## 寄書

### 展覽會の説

横濱 北野至樂

敢て達人を氣取りて斯く云ふにあらざれども、當今各地に頻々として展覽會の開催せらるゝを見聞するに及んで、余輩は日本各地の展覽會上に高擧するにはあらざれば事實の眞相を看取し難きも、世には不徳なる好事者あり、超然たるべき展覽會をして、自己を廣告するの看板となし、甚しきは入場料を以て一利せんとするの劣輩なしとせず、寔に斯會の爲め嘆惜するのみならず、又以て社會を害するものといふべし、是れ展覽會の説ある所以也。

一國政府の設備せし文部省展覽會に付きてはいざしらず、所謂地方の水彩畫展覽會にありては、其目的は奈邊に存するか、曰く水彩畫趣味普及の一言にして盡く、然らば展覽會を看板として、自作品を見せびらかすを以て目的となすが如きは、没分曉漢として余輩の與せざる所、沙汰の限り也。

善政は善教に若かず、善教は善風に若かず、善風の俗を化するや、其の然るを覺えずして然る也とかや、一般社會人をして吾等が崇美する彩畫を知らしめ、以て彼等を美風に化せしめんと欲せば、各地に於ける同好者諸君は、純美なる精神を抱き、彩畫に目なき者に對し、一點の野心あるたになく展覽會を開かば、自己の極力公衆の便を計りて親切たらん事を期せよ、斯くせば

こそ歸著する所、自然の風化實に大なり。

如何に國家が國民美性の養成に盡し、大家諸氏の熱心なる斯道奨励あるも、國民に美風あるなくんば、養成不可なり、奨励無駄たらざるを得ず、併して一般人の美性涵養は手近なる同好諸君の善く人を導くの致す所にして、諸君の任も茲に到りて甚だ重大なる哉。

自重せよ、自重せよ、余輩の所説は諸氏を瞞著するにあらず、斯かる見解が最も適恰する剴切なる眞理ならん、併じて展覽會は實に諸君の手によりて衆民を美化せんとす、衆を督促するよりも、親切を以て彼等をして自ら發作せしめよ、而して余輩は以上の言よりして茲に一の好適例を擧げて、此稿を終らんとす。

從來横濱の地たるや紅塵、衆人甚だ惡俗なり、従ひて此地に起りたる畫會にして其全きを得たるものなく、展覽會も作品の御自慢や、入場料の多少を案ずるの類なりしが、大下先生の一朝保土ヶ谷に支部を開かるゝや、先生の教示は會員諸氏が熱心と共に遂に今秋十月中旬水彩畫第一回展覽會を開くに到り、小島、山崎兩先生、愛藏の諸大家參考品十七點は當會の光榮を大ならしめ、東京研究生諸氏作品は會員出品に一段の盛を致し、港北高臺、精華あらしめたり、其會員諸氏の親切なる會期二日間不幸陰雨の爲め來會者の足を止めたりとも猶千五百人を算して餘りあるもの、寔に偶然にあらざるなり、市人を益したるや、恰も芳醇の人を酔はしむるが如く、百花の人を薰ずるが如し、其

効果や深くして且つ遠かりしを信ずるなり。

余輩は如斯純潔なる展覽會の開かれんことを望みてやまず (完)

### 東尋坊〔上〕

石川縣小松町 湯淺竹次郎

今夏越前三國に、大下先生の講習會が開設せらるべかりしを、惡雨師の爲め、遂に、残念おぢやんとしたたが、實際其地近傍は、絶好の寫生地にて、爰に、聊か記せんとする東尋坊も、曲浦五六里の三國港近岸の景色中、特筆すべき、絶景の一つである。

一寸比較するに、加賀海岸は越前の國境より一里内外を除けば、實に情け無い程變化に乏しく、只觀る、一直線の砂礫長汀のみで、北走し能登半島となれり、能登國沿岸は、再び、風光秀美だと云ふ。

私は今年七月廿三日、親友四名と組織せる千秋會員の一人として、東尋坊探勝紀行に、小松發、上り六時三分の一番列車に乗つた、粟津、大聖寺と過ぎ、六驛目の金津停車場に下車し、右左より腕車夫の呼び聲を後に聞き流し、荻原温泉へと進む。

金津驛は町内細長く屈曲甚敷、一般に家建ち銷色を帯び、一寸「古驛」と題する繪になりさうだ、町を離れ、程無く荻原温泉場、遠望し得らる距離一里弱!、一望平田にて、道程は右を雜木山なる、其腰を添ふて行けばよい、途中、温泉戻りの浴客の人力車五六臺に出會ふ、八時半、温泉館室吉と云ふに入る。

一休の後、宿へ辨當の用意と案内者兼荷持ち人夫の周旋とを依